

光明寺だより

第64号

浄土真宗本願寺派

光明寺

〒793-0030 西条市大町550

TEL 0897-53-4583

心に残る詩

目がさめてみたら 東井義雄

目がさめてみたら
生きていた
死なずに
生きていた

生きるための

一切の努力をなげすめて

眠りこけていたわたしであったのに

目がさめてみたら

生きていた

劫初ごうしよ以来

一度もなかった

まっさらな朝のどまんかに

生きていた

いや

生かされていた



秋の彼岸会法座

とき 9月26日(土)

おつとめ 13:30

おはなし 14:00

大阪教区・法栄寺・前住職

講師 小林顕英先生



一口法話

心か？形か？



ある法事でのことです。

お勤めを始める前に、浄土真宗の正式なお焼香の仕方を説明して、皆さんにその通りにしていただくようお願いしました。（＊お焼香の仕方は本紙3ページを参照してください）

お勤めが終わり、一段落したところで、一番前に座っていた檀家さんの一人が、次のように言われるのです。

「今日はお焼香の作法を色々と聞かせてもらいましたが、私は作法なんかどうでもいいと思っているんですよ。それより何といても心が大事です。心がこもってさえいりゃ、どんなやり方をしてもいいんじゃないですか。人間、何事も真心ですということが大事なことでしょ？」

と言われるのです。

つまり、「形より心。形にこだわるよ

り心が大事である。いくら形が立派であつても心が伴わなければ意味がない」というのです。

皆さん、どうでしょうか？

こうした考え方をする人がよくいます。

そこで私は、次のように答えました。「あなたの仰ることは分らないでもありません。確かに仏教では心の問題を扱います。何事においてもまず心が大事であると説きます。しかし、心が立派であれば形はどうでもいいと考えるのは大きな間違いです。

それは、例えてみれば、お祝いをする気持ち（心）があるからといって、寝巻き姿（形）で結婚式に出席するようなのです。

もし、その寝巻き姿（形）を注意された時『いや、私は誰にも負けないくらいお祝いをする気持ち（心）がある。服装くらいで、やかましく言わなくてもいいではないか』と言ったとしたら、それは矢張りおかしいでしょう。

なぜなら、あなたのその心を、他人は何で知ることが出来ますか？

寝巻き姿（形）を見て、『ああ本当に

心からお祝いしてくれているんだな』と思いますか。そうは思わないでしょう。それどころか、『何と無礼な奴じゃ』と腹を立てると思います。

あなたは、心がこもってさえおれば形はどうでもいいと言いますが、形は目に見えない心を表わすものです。形を通して見えない心が伝えられていくのです。ですから、お祝いしたいという「心」を相手に伝えたいのであれば、少なくともその結婚式にふさわしい服装（形）で出席することが、まず大事なことじゃないですか。

まあ、結婚式に寝巻きというのは極端な例かもしれませんが、心さえ立派であれば形はどうでもいいというのは、そういうことになるのです。

我々の誤解というものも、形はどうでもいいと考えていることによって起ることが多いのです。もし誤解されるようなことあれば、誤解されるような態度をとったのではないかと、我が身を振り返ってみることが大事なのです。



それから、今一つ大事なことがあります。

「心がこもってさえいれば…」というのですが、お念仏の教えを頂くと、実は一番あてにならないのが我々の「心」だと教えて下さるのです。

あなたは『人間、真心が大事だ』と言いましたが、私のどこをつついて、そんな立派なものを持ち合わせていないのです。親鸞聖人が、「虚仮不実の我が身」と仰っているように、私たちには真心のかけらもないことを知らねばなりません。

ですから、『真心さえあれば…。心がこもってさえいれば…。』と考えるのは、自惚れ以外の何物でもないのです。

『人間、真心が大事だ。形はどうでもいい』と理屈を言う前に、まずお寺へお参りして、お念仏のみ教えを聞いてみてください。そうすれば、『自惚れていたんだなあ。愚かなことを考えていたんだなあ』ということが分かんと思えます。その上で、定められた作法を懸命に身に付けようとする。それが念

仏者のたしなみというものです」

と、話したことでした。

心と形…。どちらが大事であるかと言われれば、どちらも大事であると言えるでしょう。

阿弥陀さまは色も形もない真実の世界から、南無阿弥陀仏の呼び声となり、姿・形を示された仏さまです。

それは、「形」を表わすことによって、生きとし生けるものを救いたいというという大悲の「心」を私たちに知らせんがためでした。

私たちは、その呼び声や姿・形を通して、初めて阿弥陀さまのお心を知っていくことができるのです。

大事なことは、「形」を通して、その奥にある「心」を頂いていくことだと思えます。



今回の法話は「テレフォン法話第六集」に掲載したものです。

お焼香の作法



軽く一礼する



香をつまんでそのまま
香炉に入れる。1回のみ。
香を押し戴かない。(下図参照)



合掌礼拝



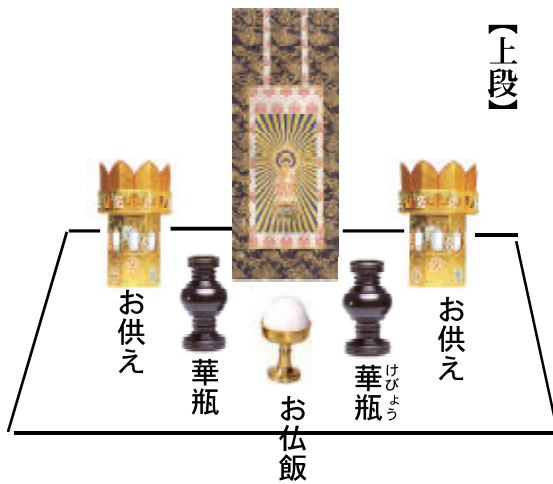
ダメ!

浄土真宗のしきたり

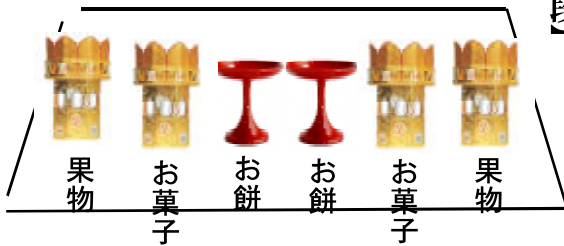
法事お飾り編

お法事は亡き人を偲びつつ、そのご命日をご縁として、この私がお念仏のみ教えに出遭わせて頂く大切な仏事です。出来る限り、お仏壇の前でお勤めをしましょう。もし、祭壇（荘厳段）を設ける時は、「祭壇は臨時のお仏壇」ということを忘れずに、お飾りをして下さい。以下、三段のお飾りを図示します

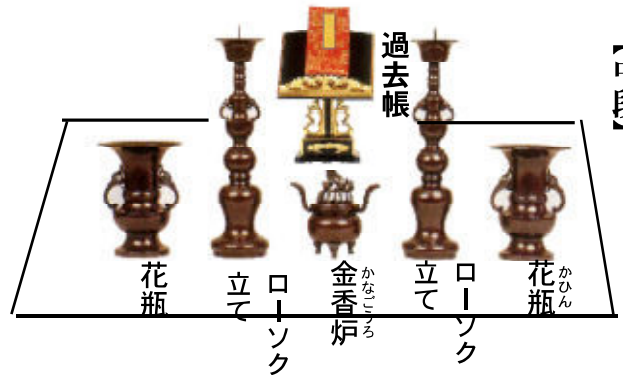
【上段】



【下段】



【中段】



上図のような器がなければ
お盆で結構です

【経机】



注意事項

- ★ご本尊は名号（南無阿弥陀仏）または、木像でも結構です。
- ★華瓶には密を入れます。
- ★花瓶には生花を入れます
- ★お供え物を盛る道具がなければ、お盆で代用して下さい。
- ★お線香は寝かします。

お供えを盛る道具

供筭 くげ



高杯 たかつき



三方 さんぼう



暮らしの中の仏教語

私たちの日常用語の中には、仏教から生まれた言葉が意外とたくさんあります。本来の意味とは全く違う使い方をしているものもありますが、そのいくつか紹介してみましよう。

★挨拶―禅宗で、悟りの度合いを試すことを挨拶と言います。

★あきらめる―物の道理をしつかりととらえ、原因、結果を明らかにするというのが本来の意味です。

★演説―教えを演べ、説くことを言います。お経に「世尊、法を演説し」、「一切の經典を演説す」等々、あります。

★我慢―自己中心の考えを押し通し、他を見下すという煩惱のことを言います。現在では我慢は、我慢（本来の意味）を抑える心という意味に使用されていることになりました。

★ガタピシ―戸の建てつけが悪くなつてガタピシしかけた、「人間関係がガタピシしては困る」などと言いますが、漢字で書くと「我他彼此」となり、自分と他人、あれとこれというように、物事を対立してとらえることです。そこからさまざまな衝突や摩擦が生じて潤いのない社会を作り出していくのです。

★しよつちゅう―「初中終」が訛つて「しよつちゅう」になりました。「法を説くに初め善く、中善く、終わり善く説け」と言われています。

★達者―真理に到達した者、悟った者のこと。

★知事―寺院の雑事や庶務をつかさどる僧の役名。

★知識―友達、親しい人のことを言います。特に仏縁を結ばせてくれる人、教え導いてくれる人を善知識と言います。

報 恩 講

12月5日（土）

おつとめ 13時

おはなし 14時

【講師】 天岸 浄圓 先生

報恩講に引き続き総代会を予定しています
総代さんにはあらためてご案内します



趣味の広場



俳句を楽しむ(四十三)

森本隆を

日本の式の美しさを代表する雪月花、なかでも月に対する日本人の感覚は繊細で特別なものがあります。丁度、季節は秋。今回は仲秋の月を詠んだ句を味わってみたいと思います。今年は十月三日が陰暦八月十五日にあたり、その夜の月が俗に言う「名月」ですね。今回、取り上げる例句はたまたま手元にあった俳誌から取らせていただきました。

月光が音たてて降る山毛櫨林 藤井 亘
仲秋の月の清澄な感じをうまくとらえた句ですね。ブナの中に月光が音をたてて射しているように感じたのは、ブナの木の中を走りのぼる清冽な水を想像したのかも知れません。

月下なり過ぐれば夢と謡ふなり 篠崎圭介
中天の名月の光を浴びながら、過ぎ去った時の流れのはかなさを謡うその声にも景にも無常感があふれています。

猫が背を濡して戻る望の夜 近藤麻理子

「望の夜」というのは仲秋の名月の夜のことです。こうこうと照る満月の光の向うから猫が帰ってくる。ちょうど露の深まる季節。名月の夜のなまめかしく美しい感じを実にうまく、しかもさりげなく句にしています。

一年中で陰暦八月十五日の夜の月が最も澄んで美しいとされ、古来「名月」と称されてきました。何と言っても秋たけなわという季節がいいですね。涼しい風、虫の音、とりどりの秋草の花、しっとりとした夜露、そういったのもろもろの風物がいつそう月を引き立て、昔から日本人の詩心をとらえたのでしよう。

名月を一晩味わえばいいというものでもありません。我々の先祖は名月の次の夜も、またその次の夜も月を愛しました。

十六夜の子の眉を引く旅役者 内田純子
十六夜の月は、ためらいながら出る月、という意味で「いざよい」と称され、その感じが子役に眉をひく旅回りの一座の役者の所作によく合っていますね。何となく懐かしさを感じさせる句です。

立待の月とホテルの聖書かな 金子青銅
十七夜になれば月の出もやや遅くなり、立って待つ程の月の出という意味で立待月と称します。旅先のホテルでの感慨句です。ビジネスホテルにはなぜかよく聖書が置いてありますが、ちよつと面白い社会の一面を何気なく詠み込んでいます。

居待とて月吐く峰を見守れり 鈴木としゑ
十八夜になると一時間ほど月の出が遅くなるので「座して待つ」という意味で居待といえます。昔は私宅なども座敷にいて月ののぼるのが見えましたが、今は家が建て込み、月も山も見えません。

明日の米研ぐ寝待月出づる頃 井沢正江
名月から四日もたつともう寝ながらにして待つぐらい月も遅く出ます。この句は、限りなくある家事を済ませ明日の米を研ぐころ、寝待月がやつと出たという意の素直な句です。一家の主婦として家族が皆無事に今日一日を過ごせたという安堵と充実感のようなものを感じます。

仲秋名月を中心に何句か月の句を鑑賞してみました。皆さんも今年は十月三〜六日ぐらいの月を眺めて一句案じてみてください。名月の夜、あいにく雨で月が出なくても古人はそれを「無月」として句を読んだりしています。なんとも月の好きな国人なのです。



住職書作品



然 自 然

本文―無為自然
むいじんねん

「何もしないのにそのように出来上がっている」ということ。

BOOK 本

「がばいばあちゃん

お寺へ行く」



出版社 本願寺出版社
著者 島田洋七
定価 700+税

ご存知島田洋七さんの最近作です。

祖母であるおばあちゃん（がばいばあちゃん）は「お念仏ばあちゃん」として地元ではよく知られた方で、洋七さんはそのおばあちゃんに連れられて毎週のようにお寺へお参りをしていたそうです。そんなおばあちゃんとの懐かしい思い出を通して「がばいばあちゃんに教えてもらったナンマンダブの心が僕の人生の支えになっている」と、語っておられます。本書は「大乘」（本願寺出版社発行）に一年間連載されたものに加筆し一冊にまとめたものですが、お念仏の香り漂う好著です。

島田洋七さんは今年2月、愛媛県仏婦大会のご講師としてもお呼びしました。

*次号発送予定・・・12月上旬

「光明寺だより」を、ご家族の
皆さんでお読み下さい。

テレホン法話
0897-53-4585



言葉のプレゼント

今まで振り返ってみて
大きな不幸と思われることが
実は
大切な人生の曲がり角であった
と思われてならない

三浦綾子



「月下美人」開花！

8月13日23時撮影

★八月十三・十四日、新盆合同追悼法要を厳修しました。多くの参拝客でにぎわいました。
★知人にいただいた月下美人がお盆の夜、見事に開花しました。
(*上図参照)
★新門様(ご門主後継者)が十一月二十四日(火)、塩屋別院にご巡教されます。
★西条高校野球部が四十七年ぶりに、甲子園出場を果たしました。残念ながら二回戦敗退でした。
★九月十五日、愛媛新聞社の取材がありました。二十七日の朝刊に掲載の予定です。

